

「あなたが残した分断と政策行き詰まりに苦しむのは私たちが す」 安倍首相への手紙

毎日新聞 2020年8月29日 19時02分(最終更新 8月29日 19時05分)

吉井理記



衆院予算委員会で質問者の野党議員に対し自席から発言する安倍晋三首相(手前)＝国会内で
2020年1月28日、川田雅浩撮影

拝啓 安倍晋三さま。昨日の記者会見、拝見しました。失礼ながら7年あまり、あなたの政権について長文記事を書き続けてきた私は、今も悩んでいます。「ご苦労様」と申し上げたい気持ちはやまやまなのですが、本当に苦労をしてきた、あるいはこれから塗炭の苦しみをなめるのは、私たち国民ではないか、という思いを深くしているからです。何のはなむけにもなりません、お手紙したためました。【吉井理記/統合デジタル取材センター】

「ビールジョッキもう1杯」演説に感じた「痛ましさ」

あれは2013年7月4日のこと。政権復帰して、最初の国政選挙になった参院選の初日、JR池袋駅での演説の一節を、今も覚えています。

「……景気も良くなって、給料も上がって、ビアガーデンでお父さんが飲むビールのジョッキも1杯にするころを、もう1杯飲もうと。お店も喜ぶ。そうやって好循環が生まれていくんです！」

金看板の「アベノミクス」を誇る文脈で語られた何の変哲もない一節です。

アベノミクスが本当に国民生活を潤したのかは後述するとして、持病もあってお酒をあまりたしなまないのに、縁が薄いはずの「ビアガーデン」とか「ビールのジョッキ」などという言葉で、それこそビアガーデンが集まる池袋の聴衆の心をつかもうとする姿に、ある種の「痛ましさ」を感じたのです。



第一声を上げる各党党首。自民・安倍晋三氏＝福島市で 2013 年 7 月 4 日午前 9 時 36 分、竹内幹撮影

この時期、10 代から悩み続けた病が寛解し、体調も良くなったあなたは、同郷の親しい政治ジャーナリストに「最近ビールなら 1 杯ぐらいは飲めるようになったんだよ」とうれしそうに話していたと聞きました。

演説を聞きつつ、ビアガーデンでジョッキをぐいぐい空けるお父さんとまでは言わずとも、俺も人並みに、ビールを少しは飲めるような体を取り戻したのだ、という喜びをかみしめているのではないかと勝手に思ったりもしたのです。

その病気の再発です。胸中は察するにあまりある。でもそのことと、あなたがこの 7 年 8 カ月、この国と社会にもたらしたものの評価は別だと思うのです。

「人の痛みを知る懐の深い政治家」になれなかった安倍氏

私は 13 年 4 月に夕刊「特集ワイド」を担当してから現在の部署に至るまで、130 本以上の長文記事で、延べ 300 人以上の与野党の国会議員や憲法学者、経済学者、作家、思想家らにインタビューしつつ、安倍政権について考えてきました。国政選挙の演説にはできるだけ足を運び、クライマックスとなっている JR 秋葉原駅前の集会は欠かさず拝見してきました。

正直に申し上げれば、実は最初はここまであなたのことを書き続けるつもりはなかったのです。



安倍晋三首相の街頭演説に集まった人たち＝JR 秋葉原駅前 2018 年 9 月 19 日午後 5 時 9 分、長谷川直亮撮影

過去の、軽薄と言っても良い歴史修正主義的な発言は知っていたし、第 1 次政権で異様な執念を見せていた教育基本法改正にも強い危うさを感じてはいたのです。

それでも、病から第 1 次政権を投げだし、世間の非難の嵐に耐えて、ついに再登板したあなたです。今度こそ、人の痛みを知る懐の深い政治家として、東日本大震災で傷ついた日本をまとめてくれるだろう、と思っていました。

ところが、違いました。

分断をあおってきたのは首相、あなただった

東京・渋谷での東京都議選の演説会があった 13 年 6 月 9 日、あなたはフェイスブックにこんな書き込みをしましたね。

「渋谷には本当に沢山の皆さんが集まって頂き感激しました。聴衆の中に左翼の人達が入って来ていて、マイクと太鼓で憎しみ込めて(笑)がなって一生懸命演説妨害してました(中略)彼らは恥ずかしい大人の代表たちでした」

私は失望よりも、恐怖を感じました。自分に異を唱える人は「左翼」で「恥ずかしい」。この粗雑に過ぎるモノの見方は何だろう、と。異を唱える人がいても、なぜ異を唱えているのかには関心を示さず、「左翼」「恥ずかしい」と攻撃する。支持者も反対者も、すべての国民の利益を代表するという指導者の姿勢とは全く違う「本音」がそこには漏れていたのです。



安倍晋三首相の街頭演説に集まり抗議する人たち＝東京都千代田区の JR 秋葉原駅前 2018 年 9 月 19 日午後 5 時 18 分、渡部直樹撮影

それから 7 年。案の定、国会審議では閣僚席に座ったまま、自らに異を唱える野党の質問者を攻撃する、といった「事件」が続発しました。思いつくままに挙げると――。

「日教組！日教組！」(15年2月19日、衆院予算委)▽「早く質問しろよ」(15年5月28日、衆院平和安全法制特別委)▽「反論させろよ、いいかげんなことばかり言うんじゃないよ」(17年6月5日、衆院決算行政監視委)▽「共産党！」(19年11月8日、参院予算委で立憲民主党の議員に)▽「意味のない質問だ」(20年2月12日、衆院予算委)——などなど。

品位がない、という次元の話ではない。「左翼」「日教組」「共産党」といった言葉を、他人を攻撃する文脈で用いていることが象徴的です。

ジャーナリストの安田浩一さんは「ネット右翼(ネトウヨ)の世界には、特定の相手を『敵』と認定し、皆で攻撃するための負のキーワードが存在します。それが『反日』『売国奴』『在日』などです。『日教組』もそんなキーワードの一つ」と指摘。「(首相も)それで相手をたじろがすことができると考えたのなら、ネトウヨ的発想に近い」「今、社会では、相手を敵か味方かに分け、敵と認定すれば皆で寄ってたかってたく風潮が広がっています」「それがとうとう国会の議論の場にまで持ち込まれてしまった。まして、一国の首相によって」と嘆いていました。

米国では今、トランプ大統領が「国の分断をあおっている」と批判されています。でも、トランプ氏以前に、反対者を攻撃し、分断をあおってきたのが安倍首相、あなただったのではないですか。

他の政治家にまで広がる「ご飯論法」

思想家の内田樹さんは、安倍政権と過去の自民党政権との違いは、意図的に国民を分断することで政権の浮揚力を得ていることであり、「今の小選挙区比例代表並立制という選挙制度なら、有権者の30%のコアな支持層を固めていけば、残り70%の有権者が反対する政策を断行しても、政権は維持できることが分かった」と分析していました。私もうなずきます。

思い出してください。今も疑惑が解明されていない森友・加計学園問題や「桜を見る会」の問題で名前が取り沙汰されるのは、例外なくあなたの「お友達」や支持者、政権に近い人物ばかりです。あなたの味方になれば「良い思い」をして、敵になれば攻撃される。

国家指導者が、国民各層を「敵」「味方」に分断する社会が、住みよい社会であるはずがありません。ポスト安倍時代に生きる国民と政治は、あなたが掘り下げた分断社会の中で、生きていかなければならないのです。

付け加えれば、あなたの国会での答弁の仕方が、今後の国会の「基準」とならないかもとても心配です。それは上西充子・法政大教授が命名した「ご飯論法」として知れ渡っています。

これは「朝ごはんを食べましたか？」と聞かれた人が、実はパンを食べているのに「ご飯は食べていない」と答えるように、「朝食を取ったかどうか」というテーマの議論について、「何を食べたか」にすり替える、といった話し方です。



桜を見る会の記念撮影で招待者に目線の方向を指示する安倍晋三首相(中央左)＝東京都新宿区の新宿御苑で2017年4月15日午前9時37分、竹内紀臣撮影

例えば前回の自民党総裁選のさなか、18年9月17日放映の「ニュース23」(TBS系)で、総裁の座を争った石破茂さんとのやりとりが思い出されます。

この時、前出の加計学園問題にからんで、石破さんからあなたが利害関係者である加計学園理事長とゴルフを重ねたことに疑問を投げかけられると、「ゴルフは五輪の種目になっている。ゴルフはだめでテニスや将棋はいいのか」と、全く無関係のことを持ち出してごまかそうとしましたね。

こうした物言いが、最近は閣僚からも聞こえてきます。こんな言葉が国会で飛び交うようになれば、有権者が政治にそっぽを向くのは当然です。国政選挙の投票率が戦後最低レベルにまで落ち込んでいること、無関係とは言い切れないと思います。

「景気回復の暖かい風」はどこに吹いているのか？

では、政策面ではどうか。例えばアベノミクスです。その柱である金融緩和ひとつとっても、目標にしていた「デフレ脱却と年率2%の物価上昇」には今なおほど遠く、19年はプラス0.5%でしかありません。

異次元とまで称される金融緩和を続けてもなお、私たちの家計の消費(2人以上世帯)は32万5492円(政権交代時の12年12月)から32万1380円(昨年12月)とむしろ減っているのはどういうことなのでしょう。

実質賃金も16年と18年を除いて、すべてマイナスなのです。国政選挙でお約束のようにおっしゃる「景気回復の暖かい風」、どこに吹いているのでしょうか。あなたのお友達の周囲でしょうか。

自民党の村上誠一郎元行政改革担当相も嘆いておられました。

「財政も金融も外交も行き詰まっている。アベノミクスで国の借金も1100兆円。目玉の異次元金融緩和は出口戦略も描けなくなりつつある。次の総裁は安倍政権の問題処理、『火中のクワ』を拾う役だ。一体誰がやるのか」

政策や政治判断を検証、誤りがあれば正すしかこの国の道はない

次の自民党総裁が歩む道は、イバラの道だ、ということです。そして、イバラのトゲに直接、身をさらされるのは私たち国民なのです。

本当に苦勞してきたのは、あるいはこれから苦勞するのは、やっぱり安倍首相ではなく、私たち国民のほうではないでしょうか。それゆえ、私は「ご苦勞様」「お疲れ様」という言葉を口にするに抵抗を感じるので

す。せめて、これまでの政策や政治判断を検証し、誤りがあれば正していく、ということでは、この国の道はないように思えます。でも、ここまで記して思い出しました。森友・加計学園問題や「桜を見る会」で明らかになったように、あなたの政権は公文書も満足に残さないのでしたね。

まずは、お体をいたわってください。できるならば、国会などで、これまで説明されていない数々の問題について、お話しされることを望みます。ではそれまで。

敬具

連載「最新の政治ニュース」をマイニュースでフォロー



吉井理記

1975年東京生まれ。西日本新聞社を経て2004年入社。憲法・平和問題、永田町の小ネタ、政治家と思想、東京の酒場に関心があります。会社では上司に、家では妻と娘と猫にしかられる毎日を、ビールとミステリ、落語、モダンジャズで癒やしています。ジャズは20代のころ「ジャズに詳しい男はモテる」と耳に挟み、聞き始めました。ジャズには少し詳しくなりましたが、モテませんでした。記者なのに人見知り。

<https://mainichi.jp/articles/20200829/k00/00m/010/164000c>